

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



播磨、備後、安芸と遊行をつづけた一遍は、正応元年（一二八八）伊予に帰り、若き日の修業地を訪れる。この時一遍五十歳、兵庫の観音堂で示寂じじやくする前の年のことである。終章はこの年、伊予に一遍が入国する場面から始まる。

一遍の一行は河野水軍の関船で安芸から海を渡り、伊予の三津口に上陸する。どこから伝え聞いたのか、磯や砂浜には天下に聞こえる名僧を一目見ようと、大勢の老若男女が集まっていた。道後奥谷おくたにの館に向かう道中、ワッショ、ワッショと踊りが始まる。鉦が鳴り、木魚が打ち鳴らされ、締太鼓の音が響く。着物の裾を乱して、若い娘が跳ね踊り、男たちのごつい手が蒼天の空に舞った。

一夜が明けた。

死が近いことを悟った一遍は、「二河白道」の巻き絵を懐にし、「窪寺」へ発った。成道地を再訪するためである。

ここまで書いて、万作の筆がとまる。小説として自由に成道地を創作すれば、そこへ一遍を向かわせることができる。しかし、それがどうしても、万作にはできないのである。一遍の研究者としての意地が、小説の中の一遍の行く手を阻んでいた。

倉田大輔がひよっこりやってきたのは、鉛筆を投げだした万作が、瀬戸内のある小島に調査に行こうかと、思案していた時だった。もうずつと昔、知り合いの郷土史家から、その小島の盆踊りが念仏踊りに似ていると聞いたことがあった。その時は他に調べたいことがいっぱいあって、気にもとめなかったが、すべて手詰まりになったいま、ささいなことでも探ってみる必要があった。

倉田はあぐらを組むと寿司折りを二つ、二人の間に置いた。

口をあけ、金魚のように息を吸い込み、額ににじみ出た汗をこっぴの手で甲でぬぐった。アパートまでの長い坂が、巨漢のかれにはこたえる。

「万ちゃん、昨日はすまん。ちよつとあっちへ行つとったんや」

不在を詫びて、もう一つ、倉田は肩で息をついた。

あつちとは、静江のいうあの女のこと、名前をみね子という。みね子は以前、かど庵の女店員だったが、いまは倉田が所有するマンションの一室に住み、街でブティックを開いている。

倉田はよく肥えた指で箱にまわしたヒモをほどき、ふたを取り、万作の前へ差し出した。

「これ、特上だ」

「なんだ今さら、口どめでもあるまいし」

「まあそういうな、一遍さんのようにはいかんわい」

そりやそうだと、と呟き、万作はウニを一貫、口に運ぶ。

倉田は朋友の箸の動きを目で楽しそうに追い、自分も一つ口にされる。八畳の部屋は、背を丸めた倉田のつやのいい禿げ頭の高さまで、書棚に入りきらない本が積み上げられている。

「あいつ、何かいよったかの」

と倉田が静江のことを訊いた。

「いや。何も」

と万作は応え、寿司を頬張る倉田から目をそらせた。

静江は今でも、女盛りのみね子が亭主を誘惑したと信じている。みね子には、かど庵で働く前に色町にいたという噂もあったからである。しかし真偽はともあれ、色白で京人形のような顔立ちのみね子が倉田のむっこい肉体に組み敷かれる様を思い浮かべるのは、男の万作にしても愉快なことではなかった。

万作は台所に立ち、湯茶を二人の湯呑みに満たした。

「川瀬さんが夏のシンポジウムの準備会をしたい、といってきた」と万作は話題をかえた。

「そうか、万ちゃん、お前もいよいよ出番だな」

倉田は自分のことのように喜んでいいる。

「しかし、川瀬さんがこれほどやるとは思わなかった」

「うん、あれは学者しとるより、事業家に向いとらいな」

と倉田は頷き、腕を組んだ。

たしかに川瀬が松寿会の代表幹事になってからというもの、会はみるみる発展した。川瀬は記念事業実行委員会を組織すると、一遍生誕七百五十年没後七百年を記念する事業をいくつか企画

し、地元メディアをつかって発表した。そして昨年からは、記念事業の賛助金募る活動が行政と企業、それに教育機関や一般市民を対象に始まっていた。

今、賛助金は予想をこえて集まっている。

二月十五日に、宝厳寺で一遍生誕会法要が営まれたが、その後のお斎とぎの席で、賛助金の額が八百万円に達したと報告され、会場はどつとわいた。

松寿会は、地元の市民も記念事業に強い関心と期待を寄せていることに驚いたが、その驚きはやがて自信へと変わった。

八月には、一連の記念事業をしめくくる一大イベントが待っていた。「一遍上人窪寺閑室跡碑」の除幕式と記念シンポジウムである。除幕式の翌日には、中央から斯界しかいの権威を特別講師に招くシンポジウムの席上、川瀬が成道地の特定に関する研究成果を発表することになっている。

のどを鳴らし、茶をのみほすと倉田がいった。

「万ちゃん、シンポジウムでは川瀬さんの引き立て役かいな」

「いや、そんなつもりはない」

万作は、即座に否定した。

「そうよな、たしか江波説では、予州の窪寺は南予だからなあ」と倉田が万作の見解を確かめた。

万作は早くから、一遍の成道地は宇和海を望む南予の山中か、あるいはひよつとして、水軍の根城があつた瀬戸内の島ではなかったという説を発表してきた。本命はもちろん南予で、南予説に立った論文や紀行文がほとんどである。

かれはこれまで南予一帯の寺社や旧家に残された寺伝や縁起、由緒記や家系譜などを調査しつづけているが、まだ自説を決定づける物は見つかっていない。

「ぼくは、自分の考えを率直にいうだけだ」

と万作が青年のように気負うと、倉田の目が笑った。

「川瀬はなあ、お前のそんな性格を見ぬいとるからな」

と倉田はいう。川瀬は自分の発表を引き立てる演出を考えて、

学者でもない江波をもう一人のパネラーに選んだのだ、と倉田は推測していたが、そこまではさすがに口にしなかった。

「あの先生はまだ若いし研究熱心だから、多少の飛躍はあっても、一遍研究には大きな前進になっている」

と万作は川瀬を評価する。

倉田はフン、と鼻を鳴らし、

「川瀬は、北谷から何かを見つけたんかの」

と確かめた。

「それが、どうも何もないらしい」

「まあ、そうだろう。閑室やなんて、ぎょうさんな呼び方をしとるが、今でいうたら要するにテントみたいなもんやからな」

倉田はポケットから仁丹の小箱を取り出し、銀色の粒を手のひらにまくと、口へ放りこんだ。

万作は、引き出しの中の槇子の封書を手にした。ちよつとためらって、ぼんと倉田の手に渡す。

「なんだ？」

「昨日届いた。知らん女だが、書いていることは面白い」

倉田は封筒の差出人の名前と万作を交互にみて、ええのか、と断ると、便箋をぬき出し読み始めた。

「どうだ」

と万作。

「うん……」

「うんじゃ、わからんよ」

倉田は手紙から目をあげ、

「大学を出たのが昭和五十二年だとすると、今、三十五六といったところか」

と槇子の歳の計算をした。みね子と同じ歳ごろである。

「まあ、そんなところだろ」

「書道をやつとる者の字やな、ペン書きだが、どこも崩れとらん」
倉田は目でなめるように、便箋をゆっくりと操る。

「このまま放つとけんだろ？」

「そりやそうだ。女のこんな真面目な手紙は、読むだけでも値打ちがある」

倉田は便箋を封筒にしまうと、押しただく真似をして、万作へ返した。

「川瀬さんにも知らせておくよ」

「おいおい、それはやめとけ、一笑される」

「そうか」

と、万作は怪訝けげんな顔をする。

「これはまあ一種のファンレターやないか。まずは、すぐ返事を書くことや。ひよつとして、おいしい思いができるかも知れんぞ」

倉田はそういつて茶化し、立ちあがった。それから目で机上の書きかけの原稿を指し、

「書きあげたら読ませろよ万ちゃん。楽しみにしとるから」

と朋友の肩へ手をおいた。

そして、帰り際の玄関でのことである。

倉田はぬつと万作に顔を近づけて、押し殺した声で告白した。

「みね子が、身籠ったぞ」

「……？」

「わしの、子ができる」

と倉田。

「お前の子、ほんとか！」

「しっ……」

倉田は人差し指を口にあて、太い指の向こうでほくそえむ。それから大きな体をゆすって、坂道のほうへ出ていった。

万作は窓を開けて、倉田の後ろ姿をながめた。上人坂を転がるように下って行く。ふと見上げると、花曇りの空から、薄い春の日差しが温泉街の屋並の上へさしこむところだった。